

馬ツコで まちづくり



古来より馬産地として名を馳せてきたみちのく。かつて南部氏の騎馬軍団などと称され、都にも献上されていた名馬『南部駒』は途絶えましたが、南部曲り家やチャグチャグ馬コといった独特の文化が馬との関わりを今に伝えていきます。馬事文化とその歴史を大事にしながら、それらをまちづくりや市民交流に役立てようとする取り組みも目立ってきています。チャグチャグ馬コが行われるこの時期、改めて馬事文化とまちづくりについて考えてみました。

南部盛岡の馬事文化

南部の馬は、南部藩主の指導もあり、都を中心とした地域産業の発展に貢献してきました。そのため、盛岡にはチャグチャグ馬コ、流鏑馬奉納などの祭り、馬と寝食を共にする独特の南部曲り家をはじめ、競り市などが盛んに行われた旧馬検場など、馬との関わりのある文化が残っています。また、岩手の競馬の歴史は古く、明治36年には盛岡で始まっています。交通手段としては、明治・大正時代、乗合馬車が紫波や宮古、鹿角など遠路まで走っていました。

盛岡の初夏は チャグチャグと

盛岡の初夏の風物詩、チャグチャグ馬コの華麗な衣装の原点は、参勤交代の行列で荷を運ぶ際にまとった『小荷駄装束』と呼ばれるもの。

「偉い人の前に出るとき、失礼のないようにするための衣装だったのさ。鼻の上にある『鼻かくし』も、鼻に目が行かないようにするため」と教えてくれたのは塩釜馬具店3代目の塩釜孝さん。馬が装束を身につける祭りでは福島県の相馬野馬追も有名で

す。「相馬野馬追の馬は武器。装束の前かけも、矢を避けるような編み方になってる。チャグチャグ馬コはきれいに見せる、礼のための小荷駄装束」と話す塩釜さんは、鼻かくし、面がい、手綱、腹帯、装束など、チャグチャグ馬コの衣装も手がけています。そして現在は、新しい馬の飾りを生み出そうと思案中。そのため毎年ビデオに撮って研究しています。「最近では色の傾向が派手。昔は紫とか白が多かったが、赤系になってきた」とのこと。

チャグチャグの音色

「赤や青の布を前後に3本くらいつけるだけでも参拝できたんだ」と昔のチャグチャグ馬コを語る塩釜さん。下の橋のあたりで暮らしていた宮澤賢治も歌に残しているように、走って参拝する馬もいました。

「残したい日本の音100選」にも選ばれているチャグチャグ馬コは、少ない馬で鈴を

500個、多い馬は900個もつけているそうです。「400では物足りない」と塩釜さん。今でこそ馬コの鈴もほとんどが金メッキの軽いものですが、チャグチャグ馬コの鈴はもともと真ちゅう。今でも京都で作られているそうです。

馬のいる街へ

「東京で有名なのは石割桜とチャグチャグ馬コ。たった半日の祭りなのにね」と話を切り出したのは、「馬をめぐ



残っている道具を工夫しながら馬具作りを続ける塩釜孝さん。一つひとつが手仕事。右の写真はオーダーメイドで製作中のチャグチャグ馬コの飾り。文字は弘前でつくっているという。奥にあるのは市販の金メッキの鈴だが、音色が大きい。





(右) 中津川はチャグチャグ馬コの休憩地。街中でこれだけの馬が集まる景色は圧巻。
(下) 歴史資源である馬の活用を訴える玉山哲さんは、老舗書店・東山堂の社長でもあります。



る地域まるごと体験交流連携事業実行委員会」の玉山哲代表。馬事文化のある盛岡ならではの、馬市が行われた馬検場でチャグチャグ馬コ協賛イベントを企画したり、盛岡の

街に馬車を走らせる社会実験を行ってきました。

「チャグチャグ馬コは農耕馬のイメージが強いけど、南部駒は献上品にされてた馬。壇ノ浦の合戦に南部の馬が出てくるほど、歴史が古いんだよ」あくまでも、馬は観光資源である以前に歴史資源であると玉山代表は釘を刺します。歴史の深さを知り、伝えることで盛岡に残る馬事文化の再生を狙っています。

夢は定期運行

「馬車を定期便にするのが夢。でもコストが問題だね」。今の車社会と共存するには、安全確保のために、馬車の横や交差点などに人を配する必要がある、いろいろ試算してみても運営は難しいといえます。でも、ただの観光資源としてならばともかく、歴史・文化という観点から、ペイできないという理由だけで簡単には諦めるわけにはいきな

い。馬は盛岡の歴史・文化の素材の一つだからこそ社会実験では「盛岡城跡公園」を回ったのだと玉山代表は語りました。

馬と街の共存への模索

「アンケートを2回とって見たが、タクシーなども好意的に見てくれている」とのこと。アンケートからは、多少の渋滞よりも、馬によって変わる盛岡の姿に期待が寄せられています。

玉山代表は、八幡宮を中心とした門前町としての八幡町通りから馬検場までのエリアを発展させるための起爆剤に馬を使えないか考えています。「馬検場のイベントも回を重ねるとだんだん地域ぐるみの活動になってきて、旧競馬会館にあった馬の像を関係者に協力してもらって、あそこに移した。あの古い馬検場にね。古いものに光が注がれた感じで、地元も喜んでくれた。今は地元の町内会で管理してくれていますよ」と玉山代表。今年はず10月の「朝市サミット」で馬車を走らせたいと、現在、市と協議中なそうです。

馬事文化を生かすために

他都市と盛岡を差別化するために有効と考えられている馬事文化。地域活性化につながる資源としても期待されま

す。地域の特色を観光や活性化につなげるためには、その土地の歴史・文化をよく理解し、それらを守るとともに時代に合った活用を探って行かなければなりません。

盛岡には「どうして馬の文化が息づいているのか」という原点を知ること、チャグチャグ馬コへの新しい視点や馬に関連した事業を行う意義が出てきます。

文化や歴史に裏付けられて

いるからこそ本物としての価値が生まれ、そこから新商品や活性化の芽が生まれる。

馬事文化を守りながら、新しい付加価値をつくり出そうという取り組みに対して、地域や市民・企業の理解と協力が期待されます。

当所としても馬をキーワードにした個性溢れるまちづくり活動に積極的に参画・支援していくこととしています。

取材／「SANS A」企画編集委員会



実験やイベントで馬車を出している八丸由紀子さん。「馬車が通るたび、大人も子どもも、すごく幸せそうな顔になるのが見えるんです」と市民の反応をうれしそうに語ってくれました。